

Urban Design Lab. Magazine

2016.03.31 vol. 239



研究室への置き手紙

WORDS FROM THE GRADUATING STUDENTS AND TEACHERS

卒業生の置き手紙 p.2
追い出しコンパ開催 p.7

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

担当者： 今川高嶺 中島健太郎 高橋舜
編集長： 今川高嶺
編集委員： 中島健太郎 高橋舜
中井雄太 黒本剛史 砂塚大河
富田晃史 王誠凱 浜田愛



卒業生の置き手紙

Words From The Graduating Students And Teachers

今年は M2 渋谷・今川・高橋・滝澤・中島・羽野・森川の 7 名が、修士研究を発表し、研究室を去ることになりました。それぞれから研究室に送る置き手紙を掲載します。

(編集：M2 今川・中島・高橋)

高橋舜-Shun TAKAHASHI

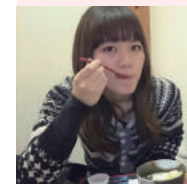
昼夜問わず研究室によくいたなあというのが 2 年間の思い出です (今川編集長には負けます)。350/365 くらいはいたと思います。これだけ長く居ると不心得者なりにも見えてきたことがありますので、それを私からの置き手紙としたいと思います。

まず、修士の皆さまにお伝えしたいこととして、研究室という小さな社会に自身が存在していることの意味をもっとよく考えて欲しいです。修士は学部時より一層洗練された環境で学問に打ち込む場所だと思っています。そういう環境、それもこの都市デザイン研という環境を自分の手で掴みとったこと、この研究室で何をする／しているのかということをもっと自分自身に問うて欲しいのです。中には「やることはやっているのだからわざわざ研究室まで行く必要も無い」「研究室ではなくて家の方が集中できる」といった人もいます。でもここは都市デザイン研究室です。研究室に来て仲間とご飯を食べる、先輩や先生方と他愛もない会話を交わすといったことが実はまちづくりにおいてすごく大切なことなのではないでしょうか。まちづくりの相手はコンピュータや算盤ではありません。生身の人間です。普段の生活でできないことがどうして実際の現場でできるのでしょうか。それぞれが現場でベストなパフォーマンスを成し遂げるためにも、ぜひ研究室に積極的な参加をしてもらいたいです。そして素晴らしい Urban Design Family とかけがえのないひとときを過ごしてください。

▶ (上) とある朝の様子
▶ (下) 修論審査会後の 906 号室の一角



森川千裕 - Chihiro MORIKAWA



都市デザイン研究室に入ってから 2 年間、あっという間でした。外部から来て、右も左も分からずとても不安でしたが、都市デザイン研究室はとても温かく迎えて下さり、不安は一気になりました。この研究室に入る前は、話し合いの場で発言することがとても苦手でしたが、プロジェクトやコンペなどで多くの議論を重ねるうちに、自分の意見が言えるようになったのが前進だなあと、しみじみ感じています。研究室や現地で議論する場があり、仲間や地元の人たちが何をどう考えているのかを知る度に、刺激を受けていました。

他にも前進していると感じることは多くあり、今の私があるのも、いい仲間や先輩後輩、素晴らしい先生方に出会え、多くの議論を重ねたり、アドバイスをいただいたりしたおかげです。本当に今までありがとうございました。ここでの経験を次に活かせるよう、頑張ります。

▶ (上) 浦安プロジェクトで議論の様子
▶ (下) 三国プロジェクトで議論の様子



滝澤暢之-Nobuyuki TAKIZAWA



大学院生活を振り返るとあっという間だったような、でもあまりに多くの出来事がありすぎて 2 年前が遥か昔のような、今はそんな不思議な感覚です。

この 2 年間、数え切れないほど多くの出会いがありました。研究室の同期や先輩後輩そして個性豊かな先生方はもちろんのこと、プロジェクトや研究を通じてたくさんのまちの人と関わることができました。9 階に研究室内外の人々が昼夜問わずひっきりなしに出入りする様子を見て『ここは都市デザイン“研究室”ではなく都市デザイン“事務所”なんじゃないか』なんて冗談を言っていたこともありましたが、デザ研のこの圧倒的な人との関わりの多さこそ他の一般的な研究室との一番の違いだと思っていて、自分自身ここに来ていなければ佐原の住民や香取市役所の愉快な方々とは会うことも、ましてや高校生と一緒にまちづくり活動をするなんて稀有な経験も決してできなかった気がします。この 2 年間で得たものとはただ都市に関する知見のみにあらず、そうした活動を通じた多くの人々との関わりが何よりもこれからの人生の糧になるのではないかと考えています。

たまにしか研究室に顔を出さなかったのにいつも気さくに接してくれた皆さん、そして何から何までお世話になった先生方、今まで本当にありがとうございました。そして修論発表は終わったものの自分探しのためにもう一年研究室に籍を置くことになったので、これからもどうぞよろしくをお願いします。

▶ (上) 或る日のさわば
▶ (下) 秋の大祭展示の最後に撮った写真



中島健太郎 -Kentaro NAKAJIMA



2年間を振り返ると、本当に色々なことに取り組んだという印象です。都市デザイン研究室は、コミットすればするほど何かを返してくれる場所でした。ともすれば主体性が無いと一喝されそうではありますが、自分はただ周りで起こった波に乗っただけで、しかしながら結果として、すごく遠いところまで行けたような気がしています。

修士課程の総決算を修士研究とするならば、私はコンペ・スタジオ・都市計画実務のバイトと随分と余計なことをしました。これらは直接的に研究に役立つことはありません。しかしながら、一見遠回りのようなこうした経験は、絶対に必要なものであったと、今更ながら実感しています。

後輩のみなさんもおそらく忙しい毎日の中、研究等のプレッシャーも相まって、今やっていることが正しいのかどうか、自信が持てなくなることもあると思います（私もそうでした）。でも私は、今やっていることをしっかりやり切って欲しいと思います。その対象は、プロジェクトでも、コンペでも、研究室と関係ない別の何かでも、もちろん研究でも、何でも良いと思います。私の乏しい経験上の話になりますが、のめり込んだものは期待する以上のものを与えてくれます。

最後になりますが、お世話になった先生方、先輩・後輩のみなさま、同期のみんな、ありがとうございました。今後は新宿でがんばります。

▶（上）UDCのコンペ「丘の上スタイル！」
▶（下）雨上がりの信濃町を歩く



羽野明帆 -Akiho HANO



二年間を振り返ると、一年目は長く、二年目は短く感じたように思います。1年目は、スタジオ、コンペ、プロジェクトのどれもが、立ち止まって考え込むことを許される場所だったように思います。立ち止まらない方がよいのかもしれませんが、私にとっては、あの答えの出ない問いをみんなで唸って考え続けた時間も財産だったと感じています。

二年目は特に神田プロジェクトで、研究室より現地に足を運ぶことが多かったように思います。プロジェクト、研究の対象地が近かったことは幸運でした。新しく入っていく地域で、新参者の私たちに本当によくしてくださった地域の方々には本当に感謝しています。地域の人の生活の一部を割って頂くことに対し誠実な態度を取らなければという緊張感は、少なからず自分を成長させてくれたと思います。後悔の残る部分もありますが、卒業後も関わり続けたい地域があるというのはそれだけ多くの経験を頂いた結果で、本当に有難いことです。

この二年を通じ一人では何もできないときが多くあり、そのたびに先生方、研究室の皆さんに助けて頂きました。研究室から頂いたものは多くある一方で、お返しになる何かを残せたとはまだ思えていません。ここから社会に出て研究室で得た経験を還元していくと同時に、また研究室を訪れて何かお返しができるように力を付けていきたいと思います。本当にありがとうございました。

▶（上）一年目、大槌で行った調査報告。
▶（下）神田PJ二年目の方針をまとめて助成申請したとき。



今川高嶺 -Takane IMAGAWA



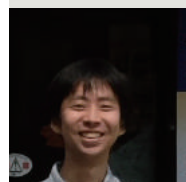
卒業研究では、貨物輸送のシミュレーションをやりました。経済性と時間という価値指標に従って、それを最適化するための手法の研究でした。僕にとってはそれはある意味で非常に曖昧な研究に思えました。だから、社会に出る前に、都市にとって、そこで暮らす人にとってそもそも価値のある事とは何なのかということを根本から考え直したいと思い、2年前に都市デザイン研究室の門を叩きました。そして、プロジェクトや修士研究を通じて、自身の未熟さと無力さを痛感し、それでも前に進まなければならない辛さを経験しました。結局二年勉強しただけでは何も分からないわけですが、少なくとも考え方、見方、想像力とそれらの鍛え方の感覚を肌に覚えさせることが出来ました。また、大学時代は効率ばかりを求めていましたが、大学院では一見遠回りに見える事も丁寧にしようと誓いました。一つ一つの行為に対して、「なぜそれをするのか？」と問いかけることはもちろん必要ですが、その上で色んな無駄を楽しむことは、学生時代にしか出来ない貴重な事でした。

勉強には終わりはなく、どんな場所でも学ぶことができるはずです。この経験を活かして、社会人になってからも一生勉強し、考え、実践し、そしてまた学ぶことを繰り返し、一生わくわくする人生を送りたいと思っています。お世話になった先生方、先輩、後輩、同期の皆さま、ありがとうございました。

▶（上）毎日見続けた研究室
▶石徹白でOBの平野さんと



渋谷政秀 -Masahide SHIBUYA



短い期間でしたが、先生方、研究室の皆さま、大変お世話になりました！都市工での二年半、PJや修論のみならず、WSや演習への参加など様々なことに取り組む機会を得ましたが、その中で先生方や研究室の皆さんと一緒に考えたり議論したことを通じて非常に多くを学ぶことができました。ただ結局最後まで自分のことで精一杯で、PJ以外ではあまり研究室の皆と話せなかったことを少し心残りに感じています…。この先どこかの都市で、一緒に何かできる機会があったらいいなと思っています。

最後に、二年半を振り返って修士の皆さんに伝えたいことがあるとすれば、何をやらないか、ということをしっかり考えたほうがいいということでしょうか。この研究室の学生は皆一生懸命な人ばかりで、PJや研究以外にも様々なことに取り組んでいると思います。それで得られるものも沢山あるだろう

けれども、やはり一つ一つの深さは犠牲になりがちです。振り返ってみると、もっと掘り下げればもっと面白いものが得られたはずと思うことが沢山あって、非常にもったいなかったと後悔しています。結局どうすべきかは自分自身の目的によると思いますが、少なくともやりたいと思って始めたことからちゃんと学びを得るには、日常生活の部分も含め捨てるべきことについてしっかり考えるべきなのではと感じています。悔いのない学生生活を過ごしてください。皆様、ありがとうございました！今後ともよろしくお願いします。

▶（上）松本調査。がつつりまちを歩きました
▶（下）タイにも行かせてもらいました



黒瀬武史先生 - Takefumi KUROSE



正直に言えば、「都市デザイン」というものは殆ど理解していなかった。講義で、現場のことを楽しそうに話す北沢先生、西村先生、そして先輩方に惹かれて研究室を決めたのは、2003年の春のことだった。9Fの丹下机で、10Fのテラスで、プロジェクト先の畳の上で、ほとんどは雑談を、時にまちのことを語り合った、本当に自由に過ごした時間だった。喜多方、大野村、京浜臨海部、西安、忙しくても、今までにない「何か」を提案しようというワクワクした感覚があった。

就職した日建設計では、本当にやりがいのある、他の場所では経験できないような仕事を任せて頂いた。だから、大学に戻るかどうか、実はかなり悩んだ。そして、大学に戻るのであれば、「普通のまち」や「条件が不利な場所」が、前を向いて歩いていける方法を考えようと思った。

2010年の秋、大学に戻ったが、学生が「自由にやる」ことに伴走するのは、思いの外、大変なことだった。西村先生のあたたかな眼差しは、その大変さを当たり前に受け止める覚悟とともにあることを知った。2011年春から窪田さんと復興の現場を歩いた。ともに思い悩んだ時間をしっかりと自身に刻んで、自分の歩み方を考えたい。



▲黒瀬先生とは、研究活動以外にも様々な場所でお世話になりました。
この写真は研究室旅行での一枚。

助教の5年間は、研究室会議でも、プロジェクトでも、中島直人さん、野原さんの背中を追った5年間でもあった。一人ではとても追いつけないが、鹿児島では阿部さん、大槌では永瀬さんと、POPSでChris、ネパールでは森さん、同じ研究室に同僚がいて、プロジェクトと一緒にできる環境は、恵まれていた。伸さんが、博士に在籍していない自分を「同期」と呼んでくれたことが嬉しかった。そして、教員としてとても未熟だった自分を一番成長させてくれたのは、ふらりと立ち寄った自分との議論に懲りずに付き合ってくれた学生たちだと思う。ジュリーや審査会は、自分のときのように緊張した。

もう少し、都市デザイン研究室の豊かさを吸収したいという思いもある。けれど、都市を学びながら、高校卒業以来、故郷である九州に、全く関わっていなかった負目のようなものに、やっと向き合えることが楽しみでもある。

都市の現場に向き合い続けていれば、研究室の仲間とは、いつでも会える、何年経っても、変わらず語り合える。そんな気がする場所で、青春の大半を過ごすことができて幸せだった。この場を借りて、研究室に関わる全ての方々に心からの感謝を記して。



▲中島伸先生と黒瀬先生の第一子誕生を祝っての一枚。
ここ数年は研究活動以外でも大変な時期だったのではないかと思います。

Christian DIMMER 先生



Cities and human settlements are complex and highly dynamic and become ever more so. In order to make cities more livable and lovable we need to put human well-being in the centre. There is no one single practice or formula to do so, and finding the right balance requires us to collaborate and co-design with experts of many disciplines and local communities. To achieve

this, we need to be open-minded, curious, and keen to experiment. The Urban Design Lab. is practicing these plural skills and I am glad that I had a chance to learn from all of you. It is my sincerest wish that we continue to collaborate in the future and contribute to the emergence urban design from our different perspectives. I am looking forward to share what I have learned from you with my new students at Waseda University.



▲ Tokyo Transitions collects and maps citizen-driven urbanism projects in and outside of Japan, to facilitate mutual learning and empowerment.



▲ Tokyo Transitions (www.tokyo-transitions.net) is an experimental platform for connecting diverse forms of community-based place-making.

追い出しコンパ開催

Farewell Party was Hosted.

3/24、修了式の後、コンパ係のM1 川田を中心に、黒瀬先生・M2の追い出しコンパが神楽坂にて盛大に開かれました。今年はムービーが多用され、プロジェクトでお世話になった方々や、研究室のメンバーからのメッセージが多く寄せられ、感慨深い時間となりました。また、都市デザイン研究室・地域デザイン研究室合同でのパーティーとなり、両研究室と一緒に過ごした時間と、そしてその後分かれた時間の双方の充実ぶりをお互いに確認する会にもなりました。

その後、黒瀬先生や諸先生方、M2メンバーからのメッセージが去りゆく研究室メンバーと残るメンバーにそれぞれ贈られました。特に黒瀬先生と他の先生方との間には、確かな信頼関係を感じさせられました。最後に双方がプレゼントを交換し、一次会は終了となりました。この場で贈られた言葉はとても重く響き、またそれ以上に二年間で経験したこと・考えていたことを改めて思い起こさせられ、新天地でも研究室で経験したことを活かして邁進して行くことを改めて誓いました。(M2・今川)



▲九州大学に赴任する黒瀬助教と新編集長となったM2 黒本



▲窪田先生へ思い出をプレゼント。



▲黒瀬先生へのプレゼント



▲研究室に送られたソファ・ベッド



▲M2に贈られた本郷の地図入りマグカップ

Information

4月の予定

4/7 神田PJ：冊子発表会
4/14 プロジェクト報告会
4/28 新入生歓迎会

✂ 編集後記

今川高嶺

ついに編集長としての仕事も最後になりました。こうして3/31にマガジンの編集をしていると、明日から社会人になるということが信じられません。ところで、卒業後の進路は皆バラバラなわけですが、神田プロジェクトのメンバーは卒業後もそこに住んだり務めたりして、神田人への道を歩むことになりそうです。何か不思議な引力が、僕たちと都市デザイン研究室の間を取り持っているように感じます。また神田や佐原、研究室や、そのまちかで僕に出会ったらよろしくお願いします。(P.S. ちなみに皆さんの写真は新入生の頃の写真を掲載してみました。皆、どこか変わりましたね。

